〔東京家政大学研究紀要　第37集 (1), p. 1～9, 1997〕

「脱亜論」再考
－その国際的背景と時代精神－

荻野　治雄

（平成８年９月30日受理）

Reconsiderations of Fukuzawa's '*Getting out of Asia*': Its International background and Zeitgeist

Haruo OGINO

(Received September 30, 1996)

ユネスコ憲章の前文に「戦争は人の心の中で生まれるものであるから，人の心の中に平和のとりでを築かねばならない」ということばがある．20世紀における二度の世界大戦の惨禍を繰り返すまいとする人類の悲願がこの宣言にもり込まれている．そして，人の心の中に平和のとりでを築くためには，相互の風習と生活を知り合い，疑惑と不信をを取り除くことが必要であるが，同時に，人類の知的および精神的連帯を欠くことができないと憲章は続けている．これは国際教育の理念でもある．

本稿は，国際教育の観点から日本のアジア認識の変化の過程を福沢の「脱亜論」を中心に検討し，欧米イデオロギーを基盤とする国際関係の枠組みの中で日本が辿った軌跡を確認することを目的としている．

1　「西力東漸」－西洋の衝撃

１９世紀の初頭はヨーロッパも非ヨーロッパも農業生産が経済の基盤であり，アジアの生産高は人口が少ないヨーロッパよりも大きかったのではないかと思われる．しかし産業革命によって蒸気エンジンと動力織機が出現するとヨーロッパと非ヨーロッパの生産高の比率は大幅に変化した．

清と英国との貿易は茶葉が中心であった．茶は１６世紀の初めに，船員や伝道師によってヨーロッパに紹介されていた．最初は貴重薬として計り売りされていたが，しだいに喫茶の習慣が一般に広がっていった．１８世紀後半以降は，紅茶(black tea) はイギリス人の生活必需品になった．茶葉は中国原産であったから，イギリスは清から大量の茶を買いつけていた．しかし清国にとっては英国からの輸入品である時計，ラシャ，毛織物等は奢侈品であった．英国は本国で生産される綿糸，綿布[1]の売り込みを図ったが，なお，入超貿易になっていたから英国は多額の代金を銀で決済しなければならなかった．

このような輸出入のインバランスを劇的に逆転したのがインド特産のアヘンである．東インド会社はインドにおけるアヘンの専売権を握り，地方貿易商人(country trade) を使って中国へ運んだ．こうして１８３０年代になると銀は逆に中国から海外へ急激に流出していった．清がイギリス商人のアヘンを没収し焼却したのをきっかけに，英国はこれを好機として清に宣戦した．清は近代装備を誇る英軍の前になす術もなく圧倒された．

１８４２年，南京条約が締結され，清は英国に５港の開港，香港の割譲，関税率の設定，賠償金の支払いを認めざるをえなかった．関税率の設定は清にとって関税自主権の喪失を意味した．また，翌年追加条約として結ばれた五港通商章程において清は領事裁判権を認めた．こうして事実上清は英国に完全に屈服した．他の欧米帝国主義諸国はこれを手を拱いて見ているわけがなく，１８４４年，清は，アメリカとの間に望厦条約，フランスとの間に黄埔条約を結ばねばならなかった．当時の世界システムにあっては当然のことで，いずれも不平等条約であった．東南アジアは，すでに１９世紀の初めから西欧列強に蚕食されていたが，アヘン戦争はそれが東アジアに及んだ最初であり，また，未だ前近代の歴史を歩んでいたアジアにとっては弔鐘ともなった．１８世紀後半に始まった産業革命による科学技術の進歩が著しい欧米諸国の侵略の前にアジアは打つ手を見出せなかった．

教養部　英語第１研究室（３２２）

ケネディーは次のように書いている.[2]

「蒸気エンジンと機械で作られた道具に代表されるテクノロジーの発達により，ヨーロッパは経済的にも軍事的にも圧倒的な優位をかちえた．先込め式の銃(muzzle-loader)（撃発雷管，銃身の施条など）の改善は，まさに不吉な前兆であり，元込め式の銃(breechloader)が出現して発射速度が大幅に高まったことは大きな前進となる．そして，ガトリング銃，マキシム銃，軽量の野砲が最後の仕上げになって新たな「火器革命」が完成し，旧式の兵器に頼っている現地人(indigeous peoples)は抵抗しようにも，まったくそのすべがなくなってしまった．そのうえ，蒸気エンジンを搭載した砲艦(gunboat)が登場し，すでに公海を支配していたヨーロッパの海軍は，ニジェールやインダス，揚子江などの大きな河川づたいに内陸部にまで入り込むようになる．こうして，移動性と火力にすぐれた甲鉄艦(ironclad)『ネメシス』は１８４１年と４２年のアヘン戦争で活躍し，中国防衛軍を惨憺たる目にあわせて，蹴散らした」．中国に長いあいだ在留していた伝道師のギュラフは，「英国のフリゲート艦一隻は，全清国海軍一千隻の兵船を撃破しうる」と報告した.[3]

2　戦術としての「和魂洋才」

アヘン戦争が日本に及ぼした影響は極めてドラスティックであった．佐藤信淵，高島秋帆，横井小楠ら幕末期の思想家にも触れる必要があるが，本稿では，アヘン戦争の影響を主として佐久間象山の思想を中心に検討する．象山における国際情勢認識・国際感覚は１９世紀中葉における日本の思想界では特筆に価すると考えられるからである．

象山は朱子学を徳川幕藩体制の教学と信じてきたが，アヘン戦争の衝撃は極めて大きく，これを国家的危機と捉え，１８４２年「海防八策」を書いた．この上書は，当時攘夷思想をもっていた象山のナショナリズムの発露である．彼は「何れにも意には本邦之患と相成るべき事」[4]になることを予感し，海防の重要性を指摘，そのための蘭学と西洋の軍事技術の習得の必要を強調した．彼はロシアとイギリスが日本を攻撃する危険があることも指摘し，日本は近代的な軍事装備を整え，その製造方法を学んで戦争に備えなければならないと主張した.[5]

象山の主張は次のように要約できる．西洋の諸国がすでに物質的に圧倒的な実力をもっているのは西洋の学問には論理性があるのに，中国の学問にはそれが欠如しているからである．清国はこのことを理解できなかったためにアヘン戦争でイギリスに敗北した．したがって，日本が中国と同じ運命を辿ることを避けようとするならば，広く国民が単に戦争に直接応用できるものだけでなく，さまざまな分野で西洋がもっているものを学びとらなければならない.[6]

彼は，一部の指導層だけが西洋の科学知識，文化を身につけているだけでは国家存立の危機を乗りきることはできないと考えた．このことは，彼がハルマ辞書の刊行に努力したことからもわかる．国力を強化するために，一般の国民が構成する底辺の厚みを増すことを重視するという先見性を彼は身につけていたということである．象山にはすでに後年，福沢に見られるような先覚者の目があった．

象山は「礼楽の国」である清が「夷狄の国」イギリスに敗れたのは中国や日本の儒学が実用に乏しくなり「万物の窮理其実を失」ったためであると考えた．象山においては，研究を重ねてきた朱子学の「格物窮理」の概念が有名な「東洋の道徳」と「西洋の芸術」とを媒介する機能を果たしたのではないかと考えられている.[7]

「東洋の道徳」と「西洋の芸術」の使い分けは当時の日本において非常に説得力のある方法論であったと思われる．「西洋の芸術」とは，この場合，西洋の科学技術ということで，「東洋の道徳」と「西洋の芸術」の使い分けはいわゆる「和魂洋才」の発想である．

He left a number of students to carry his thinking forward into Meiji Japan. He also bequeathed to posterity yet another slogan: 'Eastern ethics, Western science'. At its simplest this could be taken to mean no more than retaining traditional values while introducing technological innovation to Japan. In reality, however, there was rather more to Sakuma's ideas than that: he was moving away from the concept of defending a culture towards that of defending a country. He saw in the politics of Peter the Great a model for what needed to be done in Japan, that is, to ensure political unity, introduce Western technology, build a fleet, and so win international recognition.[8]

（象山は多くの弟子をもっていて，彼らが明治維新以降

の時代に彼の思想を伝えた．彼は「東洋の道徳，西洋の芸術」という彼のもう一つのスローガンを後代に伝えた．このスローガンは単純には伝統的な価値感を維持し，その一方で新しい科学技術を日本に導入するということでしかないが，象山にとってはそれよりも重い意味があった．彼は文化を守るという考え方からしだいに国を守るという考え方（国家の存立意義）へ方向を転じつつあった．西洋の科学技術を導入するのは国を守るためであるというのが象山の信念になった．）

情報が著しく不足し，外交政策が混乱していた当時の国内情勢を考えると象山の先見性には目をみはらせるものがある．開国論を唱えた象山は１８６４年，攘夷派によって暗殺されたが，これも我が国の歴史において繰り返されてきた先覚者の悲劇であった．

3　１９世紀後半のアジア

1）中国の実情と日本の対中国観

華夷意識に固執する清はアヘン戦争に敗北した後も，国政改革に何の手も打たなかった．そのため治安が悪化し「世直し」を求めて民衆が蜂起，１８５１年「太平天国革命」が勃発したが，清は有効な対策を講じることができなかった．１８５６年に「アロー号事件」が発生するとイギリスはフランスと連合し，さらにアメリカ，ロシアも加わって清に条約改正を要求し，清がこれを拒否すると，イギリス・フランス連合軍は清を攻撃して１８５８年に屈服させた．清は４か国と個別に天津条約を結び，さらに北京条約により事実上半植民地化された．

この第２次アヘン戦争は，開港場の増加とアヘン貿易の合法化により市場の拡大を求める英国産業資本がヘゲモニーをにぎっていた．清は天津・北京条約によりアヘン貿易の公認を強要されたのである．これは欧米帝国主義による侵略のモデルそのものであった．ロシアはすでにアイグン条約により沿海州を併合していた．

「太平天国革命」の末期の１８６０年代になると清は西欧のテクノロジーの優秀性を認識し，「自強」のスローガンのもとに近代化を図るようになる．「洋務運動」である．当然，軍事力の強化が主たる目的であったが，これは日本の富国強兵策に通ずるものがある．このような改革にもかかわらず，清は時代錯誤的な華夷意識から完全には脱却できなかった．

こうして，十数世紀にわたって中国を師と仰いできた日本の「心酔的な中国崇拝」は微妙な影を生じ始める．日本の対清イメージの変化である．清は列強の東洋への進出により，存亡の危機に瀕しているにもかかわらず，専制的な旧体制にどっぷりと漬かったままで，近代化を図ろうとしない「因循固陋」な旧時代的国家であると日本は判断するようになる．

2）朝鮮の実情と日本の対朝鮮観

アヘン戦争の敗北により清が開国したことや，日本がアメリカの砲艦外交(Gunboat diplomacy）に屈して開国せざるをえなかったことは李朝の朝鮮に強烈な衝撃を与えたが，朝鮮は１８５０年代には未だ鎖国攘夷思想が大勢を占めていた．しかし６０年代に入ると開化思想が芽生え，世界情勢の変化を視野において改革を進めるべきだとする主張が名門両班出身の若手官僚に支持されるようにはなったが，大院君のもとでの朝鮮支配層には依然として鎖国攘夷思想が濃厚であった．このような国情のなかで１８７５（明治８）年，日本の軍艦雲揚号が朝鮮の領海に侵入して挑発し，江華水道に進入して砲撃戦となった．この問題を処理するために１８７６年２月，日本は朝鮮との交渉を進め，日朝修好条規（江華条約）を締結し，朝鮮はついに開国した．日朝修好条規は日本が欧米列強によって強制された不平等条約を朝鮮に強要したものである．これは弱肉強食の帝国主義政策そのものであった．[9] その第１条が「朝鮮国ハ自主ノ邦ニシテ日本国ト平等ノ権利ヲ保有セリ」となっているのは，我が国が，朝鮮と清の宋属関係を断ち切り，朝鮮を日本の勢力圏に組み込むことをねらいとしたものであった．[10] こうして日本は維新後１０年を経ずしてアジア隣邦侵略の第一歩を進めたのである．

１８９０（明治２３）年，山県有朋は「外交政策論」において，「国家独立ノ道二ツアリ，一ニ曰ク主権線ヲ防禦シ他人ノ侵害ヲ容レズ，二ニ曰ク利益線ヲ防護シ自己ノ形勝（有利）ヲ失ハス，何ヲカ主権線ト謂ウ，彊土是ナリ，何ヲカ利益線ト謂ウ，隣国接触ノ勢我カ主権線ノ安危ト緊シク関係スルノ区域是ナリ．……

我邦利益線ノ焦点ハ実ニ朝鮮ニアリ，西伯利鉄道ハ已ニ中央亜細亜ニ進ミ其数年ヲ出ズシテ竣功スルニ及テハ……．吾人ハ西伯利鉄道完成ノ日ハ即チ朝鮮ニ多事ナルノ時ナルコトヲ忘ル可ラス，又朝鮮多事ナルノ時ハ東洋ニ一大変動ヲ生スルノ機ナルコトヲ忘ル可ラス．」と述べた．山県の判断は，朝鮮を日本の保護国とする野心を明確に示したものである．

4　東アジア共同防衛に対する日本の姿勢

西欧列強によるアジア侵略を防ぐための対策を打ち出すことは日本にとって緊急の課題であった.

1)　清国との提携論：唇歯輔車

清の衰退の理由がその「因循固陋」にあるという判断はすでに幕末にあり，横井小楠の『強兵論』（１８６０年）にもみられるが，前述したように，「東洋道徳」への信仰にはなお根強いものがあり，それが伝統的な中国への親近感あるいは畏敬の念につながって，維新から明治１０年代半ばまでは清国及びその宗属国朝鮮と提携して欧米列強の帝国主義に対抗すべきだとする判断があり，このような提携論は西欧列強の脅威が強まるにつれて，たえずよみがえってきた.[11] 岩倉具視の上奏文（明治８年２月）にもこれをみることができる.

「我が皇国の清国におけるや比隣にして，いわゆる唇歯の国なり，もし清国にして彼れ（ロシアを指す）に呑噬せらるゝこと有る時は，唇亡びて歯寒きの憂あり，故に清国とはますます交情を結び，友誼を厚うし，車の両輪の如く，鳥の双翼の如く，彼我相倚り，相扶け，並立両全せんことを務むべし」（『岩倉公実記』下）つまり，清と我が国は運命共同体であるとする考え方である.

2)　日本盟主論

しかし明治１０年代半ばになると，近代化が依然として進まない清及び朝鮮の実態と西欧先進諸国の清への進出を見て，日本は危機感を強める．今や提携論は非現実的であるという認識をもった我が国はアジアの盟主となって朝鮮・清を近代化し西欧諸国に対抗しようとした．福沢の判断を見よう.

１９８１（明治１４）年に出版された福沢の『時事小言』にみられる次の一文はこのことを雄弁に物語っている.

「今西洋の諸国が威勢を以て東洋に迫る其有様は火の蔓延するものに異ならず．然るに東洋諸國殊に我近隣なる支那朝鮮等の遅鈍にして其勢に当ること能はざるは，木造板屋の火に堪えるざるものに等し．故に我が日本の武力を以て之に応援するは，単に他の為に非ずして自から為にするものと知る可し．武以て之を保護し，文以て之を誘導し，速に我例に倣て近時の文明に入らしめざる可らず．或は止むを得ざるの場合に於ては，力を以て其進歩を脅迫するも可なり．輔車相依り唇歯相助けるとは，同等の國と國との間に通用する可しと雖ども，今の支那朝鮮に向て互いに相依頼せんことを望むは，迂闊の甚しきものと云う可し．何ぞ之を輔と為し又唇と為すに足らんや.」[12]「其進歩を脅迫する」という字句には福沢の思い入れの強さがにじみ出ている.

また，８２年には，「方今，西洋諸国の文明は日に進歩して，其の文明の進歩と共に兵備も亦日に増進し，其の兵備の増進と共に，呑併の慾心も亦，日に増進するは自然の勢いにして，其慾を逞ふするの地は亜細亜の東方に在るや明なり．此時に当て亜細亜州中，協心同力，以て西洋人の侵凌を防がんとして，何れの国かよく其魁を為して其の盟主たる可きや．我輩敢えて自ら自国を誇るに非ず，虚心平気これを視るも，亜細亜に於て，此首魁盟主に任ずる者は，我日本なりと云わざるを得ず.」[13] と書いている．欧米列強のアジアへの侵略に対抗するためには日本以外にリーダーシップを取れる国はないという福沢の主張には「遅鈍」な隣国を救おうとする強い意志を汲みとることができる.

5　福沢の親朝鮮姿勢

清国・朝鮮を遅鈍の国として西欧諸国の勢いに当ること能わずと福沢は述べているが，彼の両国に対する見方には微妙な違いがあった.

中国に対しては強い反感をもっていたが，それは中国が彼が嫌悪した儒教道徳の本家であることも影響している.「支那朝鮮は彼が歴史的必然と信じた文明開化の世界的浸潤に抵抗する保守反動勢力の最後の牙城と映じたのである．されば朝鮮の近代化運動への我国の後援をめぐって，対清関係が漸く悪化するや，従来の国内儒教思潮に対する諭吉の抗争の全エネルギーは挙げて，儒教の宗国としての支那に対する敵対意識に転じて行ったことは極めて自然であった」.[14] また，福沢は１８８２（明治１５）年，『時事新報』に次のような論説を載せている．彼は１８６１（文久２）年，開市開港延期交渉のための遣欧使節に随行した．使節団が乗り組んだ英国軍艦オーディン号が香港に停泊中に，彼は英国人が支那人の小商人にみせる横暴な態度を目撃した.

「彼の輩（英国人，筆者注）が東洋諸国を横行するは無人の里に在るが如し．在昔，我日本国中に幕吏の横行したるものよりも一層の威権にして，心中定めて愉快なることならん．我帝国日本にも幾億万円の貿易を行ふて，幾百千艘の軍艦を備へ，日章の旌旗を支那印度の海面に翻へして，遠くは西洋の諸港にも出入し，大に国威を燿

かすの勢を得たらんには，支那人などを御すること彼の英人の挙動に等しきのみならず，現に其の英人をも奴隷の如くに圧制して其手足を束縛せんものをと，血気の獣心，自ら禁ずること能わざりき.」[15]（下線，筆者）

一方，福沢は朝鮮に対しては好意的，同情的な姿勢が感じられる．古陋から脱しない朝鮮を啓蒙する方法として次のように述べている．

「蓋し朝鮮の人民，決して野蛮なるに非ず，高尚の文思なきに非ずと雖ども，数百年の沈睡は，仮令ひ之を喚び起して運動を促がすも，眼光尚未だ分明ならずして，方向に迷うものゝ如し．今其眼光をして分明ならしめんとするの術を求るに，威を以て嚇す可からず，利を以て啗はしむ可らず，唯其人心の非を正して自から発明せしむるの一法あるのみ.」[16]

福沢は「日本が日韓修好条規によって，はじめて韓国の独立を承認した以上，これを支持し，その文明化を助長するのは当然の義務である」[17]と判断したのである．このことは甲申事変における独立党支援の姿勢につながっていく．

6　「脱亜論」の分析

1）「脱亜論」への過程

１８７５（明治８）年の『文明論之概略』において福沢は「此時に当て日本人の義務は唯この国体を保つ一箇条のみ．国体を保つとは自国政権を失はざることなり．政権を失はざらんとするには人民の智力を進めざる可からず．其条目は甚だ多しと雖ども，智力発生の道に於て第一着の急須は，古習の惑溺を一掃して西洋に行はるゝ文明の精神を取るに在り」（下線，筆者）と述べている．彼は文明こそ一国の独立を維持するための最善の手段であると考えたのである．[18]サンソムの次の指摘は，当時の日本政府の方針を正確に伝えている．

....., the new government began to encourage the adoption of Western ways. This was part of their plan to destroy what were called *kyuhei*, or bad old habits, and to build up national strength by assimilating those material and practical features of Occidental life which were supposed to be the true foundation of a powerful modern state.[19]

１８８１（明治１４）年の「外交論」も『文明論之概略』の主張と変わらない．「先ず我古俗旧慣を一変し，政治法律教育の大体より社会日常の細事に至るまでも，之を改めて大なる差支を見ざる限りは，勉めて西洋の風に倣ひ，亜細亜の東辺に純然たる一新西洋国を出現する程の大英断」[20]をすべきであると主張した．

一方，この時期になると日本が既に文明化，近代化を進めているにもかかわらず，清国朝鮮が以前として「野蛮」から脱することができないことに対する焦燥感も見えてくる．西欧諸国から日本が清国朝鮮と同様迷妄の国であると見做されることに対する不満である．１８８３（明治１６）年に，板垣はヨーロッパを旅行したあとの印象を次のように書いている．「例えば此に一の野蛮国あらん乎，其中に就ては多少智者の在るあるも，其多数を以て算するが故に遂に野蛮国の称を免かれざるが如く，我日本は如何に進歩して人智進み世道開くも，他の亜細亜は其野蛮愚民の多数を占めたるを以て，遂に亜細亜全体は野蛮の数を免ぐるを得ざるなり」.[21] これは日本における脱亜思想の萌芽ともみなすことができよう．屈折した日本の精神状況をよく示している．

2）「脱亜論」の語法

「脱亜論」は１８８５（明治１８）年３月１６日に，彼が編集している『時事新報』に掲載された．

「我日本の国土は亜細亜の東辺に在りと雖ども，其国民の精神は既に亜細亜の固陋を脱して西洋の文明に移りたり.」

「我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興すの猶予在る可らず，寧ろ其伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし，其支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず，正に西洋人が之に接するの風に従て処分す可きのみ．悪友を親しむ者は共に悪名を免かる可らず．我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり.」

「処分」は現代語の用法では高圧的な語感があるが，当時の使い方とすれば「対応」程度の意味であったろう．あるいは，福沢の語法では，と言うべきか．「悪友を親しむ者は共に悪名を免かる可らず」は板垣の「野蛮国の称を免かれざるが如く」と軌を一にする考え方である．また，「我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり.」の「心に於て」という表現を加えているのは「心構えとして」ということであって権力的な意味構造は含まないと考えられる．

3）「脱亜論」の背景

「脱亜論」は１８８４年１２月に起こった甲申事変が

大きく影響している．８２年，王族の朴泳考を団長とする修信使が日本を訪問した．金玉均は顧問として参加していた．金玉均と朴泳考は「近代化に邁進する日本の姿を目の当たりにして，日本をモデルにした自国の近代化の夢を描き，そのための資金調達をはかった．金玉均は借款のために残り，福沢の積極的な協力を得て横浜正金銀行（東京銀行の前身）からの借款に成功する．金玉均と朴泳考から朝鮮の近代化の夢，抱負を聞いた福沢はその積極的な支援者となった．」[22] 金玉均は守旧派の非難を受け左遷されたが，その資金で出自や家柄にとらわれず広い階層から人材を選んで東京へ留学生を派遣して軍の近代化をめざした．

１８８４（明治１７）年１２月４日，甲申事変が起こり，独立党の金玉均，朴泳考は日本公使館の全面的な援助を受けて事大党（守旧派）から政権を奪ったが，事大党は清国軍の支援を得て反撃し王宮を奪回したため，クーデタはわずか２日間で壊滅，失敗した．以後朝鮮における清の政治的影響力が強くなり，日本の影響力は後退した．このクーデタに福沢は深い関心をもっていた．彼は１２月１５日付け『時事新報』の「朝鮮事変」に，「独立党の者は正々堂々の力を以てすれば迚も事大党（守旧派）に敵する能はざるを知り，斬奸等の名を以て朝臣の重き者を除き，勢に乗じて支那兵をも逐い拂ひ，以て宿昔獨立の志を達せんとしたるの策に非ずやと推察せらるゝなり．」と書いているが，ここには福沢の独立党支援の姿勢がにじみ出ているし，また，彼が事件の真相を熟知していたのではないかと思わせるふしがある．さらに，「朝鮮国に日本党なし」（１２月１７日）では，「今回の事変は全く朝鮮国にて支那党即ち事大党と独立党との軋轢にして，其事大党の中には玩陋守旧の徒多きが故に，或は守旧と改進との争いと云う可きなれども，事大の主義に依々する閔泳翊の如きは，必ずしも文明改進の事物を嫌悪する古陋家に非ず，或は閔氏の如き人物を害する者なれば文明の敵ならんと云うに，独立党中の金氏朴氏の如きは開明に走て速なるに過ぐるも遅々するなき人物なり．左れば此変乱の原因は，文明論に非ず，開鎖論にも非ず，唯国の独立如何の問題より生じ来りたるものにして，朝鮮が不幸にして支那国に境を接し，其支那人が不幸にして国交際の大儀を軽々に看過し，対等の隣国を目して所属など唱えたるが，原因の又其原因たりと云はざるを得ず．」と書いた．清国に事変の原因があるという主張である．

１８８５（明治１８）年４月，日本は日清両国の朝鮮からの撤兵によって解決を図ることにし，伊藤博文と李鴻章の交渉により天津条約を締結した．

１８８４年の段階で，朝鮮の開化派によるクーデタ失敗と，清国の軍事力の朝鮮への浸透をみて，福沢は朝鮮が清国との宗属関係からの離脱することは不可能と判断したものと考えられる．[23]

「脱亜論」は甲申事変との直接的な関係とともに，前述のように，彼が執拗に繰り返した儒教批判との関連も濃い．また，日本国内において儒教主義が復活しつつあった事実とも無関係ではない．福沢は清国・朝鮮の文化と思想を支配する儒教こそ亡国のイデオロギーであると考えていた．「文明」を国家の独立の前提と考えていた福沢にとって，西洋の文明を拒否している「未開野蛮」のアジアすなわち清国・朝鮮は文明に対するアンチテーゼであった．ここに彼の「脱亜論」が生まれる遠因もあった．「脱亜論」には次のように書いている．

「其（支那と韓国）古風旧慣に恋々するの情は，百千年の古に異ならず．此文明日新の活劇場に，教育の事を論ずれば儒教主義と云い，学校の教旨は仁義礼智と称し，一より十に至るまで外見の虚飾のみを事として，其実際に於ては真理原則の知見なきのみか，道徳さへ地を払ふて残刻不廉恥を極め，尚傲然として自省の念なき者の如し．」

すでに古陋を脱した我が国と，以前として古風旧慣に恋々する清国・朝鮮とを西洋の諸国が同一視するのにはもはや耐えることができない．これ以上両国の開明を待っても無意味であるから日本は独自の行動をとるべきであるとするのが福沢の「脱亜」であり，清国・朝鮮と提携し，あるいは日本がアジアの盟主となって西欧の帝国主義国に対抗するというこれまでの方法論からの転換であった．

〈まとめ〉

「歴史は呵責ない教師である．歴史が明治の政治家に警告した教訓はいずれも，従属民族の地位と発展しつつある勝ち誇った帝国の地位とのあいだには中途半端な妥協点はないということであった」．[24] アジアが欧米帝国主義諸国による蚕食を許していた当時の国際環境のなかでは，「外圧に耐えうる独立国家を保持していくことが，当時のわが国の基本的課題であった」．[25] 福沢のいう「文明」の積極的な受け入れとは我が国の近代化を進め，

それによって我が国の独立と安全を確保することを意味した．よく知られている「一身独立して一国独立す」という命題は，象山が幕末に唱えた考え方の延長線上にある．急激な近代化を実現しなかったならば日本も清国と同じ運命を辿ったにちがいない．

明治新政府が採った欧化政策，富国強兵，殖産興業は危機管理対策であった．清国と朝鮮が因習にとらわれていて近代化が進まなかったのとは対照的である．当時の切迫した国際情勢を考慮するならば，福沢の「脱亜論」をもってアジアの近隣諸国の切り捨て，「入欧」の姿勢，あるいは福沢の清韓蔑視思想であると単純に決めつけることはできない．

「脱亜論」が書かれた明治１８年の段階では，日本は未だ「半開」の状態にあったから，「我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興すの猶豫ある可らず」と書いた福沢は頑迷固陋から脱しようとしない中国と朝鮮を見て，アジアの将来に強い危機感をもった．福沢には悲壮感があったろう．福沢の清国・朝鮮に対する高姿勢はこのような心情から発したものであった．「脱亜論」を「清韓両国に対する諭吉の改革絶望の宣言と見たい」[26]，あるいは「「脱亜論」は決して入欧論ではない．中国，朝鮮の文明化に絶望した反動としての日本盟主論であった」[27]という意見には説得力がある．「脱亜論」は急激な西洋化，近代化を目指した日本の「あせり」あるいは「歯がゆさ」の表出と言ったらよいのであろうか．「正に西洋人が之に接するの風に従て処分す可きのみ」「悪友を親しむ者は共に悪名を免かる可らず．我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり．」は日本が単独で西洋化を進めざるをえないとする決意表明，ぎりぎりの決断と受け止めることができよう．

現実の国際政治の舞台では，義和団事件以降，日本はアジアの一員であることを放棄し，名実ともに西欧帝国主義国の列に加わった．韓国を日本の「利益線」とする判断は，日清戦争から，１９０２年の日英同盟締結を経て日露戦争に辛うじて勝利をおさめたことにより，日本は韓国の保護国化，さらに１９１０（明治４３）年の韓国併合へとアジア侵略の道を歩み，満州事変，日中戦争，太平洋戦争とアジアの諸国に筆舌に尽しがたい苦痛を与えた．しかしながら，このような帝国主義的野心は「脱亜論」の主張とは別のものである．「脱亜論」のコンテキストからは清国・朝鮮を切り捨てて顧みないという主張を読み取ることはできない．啓蒙思想家としての福沢の影響力は非常に大きかったにせよ，政治の力学は彼の主張とは別のパラダイムで動いていたのである．福沢の啓蒙思想家としての影響力は日清戦争あるいはそれよりも少し早い時期で終わっているというのが定説である．

＊　＊　＊　＊　＊

明治維新以降の日本は，国家の独立を維持するために急激な近代化を進めたが，それと平行して西欧帝国主義国のパワーポリティックスを身につけた．[28] このことは欧米列強の論理によるアジアの否定に必然的に連動することであった．それは後発の近代国家日本の宿命であったかもしれないが，ここにはアジア蔑視，特に朝鮮に対する蔑視が付きまとった．

日韓関係は，妄言問題が間欠的に発生する現状では関係修復が非常に困難であるが，「加害者と被害者があったという歴史的事実は変わらない．先ず，それを認めてから，日本の止むを得なかった国際情勢や歴史的環境を議論すれば，新たな展開も可能である．一方，日本の釈明を感情的に封じるのは賢明ではない」[29] という金氏の冷静な判断こそ，国際教育が目指すべき方向である．

注

1) Between, say, the 1750s and the 1830s the mechanization of spinning in Britain had increased productivity in that sector alone by a factor of 300 to 400, so it is not surprising that the British share of total world manufacturing rose dramatically. (P. Kennedy: *The Rise and Fall of the Great Powers*, Vintage, N.Y. 1987, p. 148

2) P. Kennedy: *The Rise and Fall of the Great Powers*, p.150

3) 陳舜臣：実録アヘン戦争，中央公論社,1971, p.169

4) 象山全集　巻三，書簡，p.215

5) (One of the most famous Rangakusha was Sakuma Shouzan, a samurai of Matsushiro, Shinano, whose lord, Sanada Yukitsura, was appointed to the Council of State in Mizuno Tadakuni's time and put in charge of coast defence.) A knowledge of and interest in defence policy, acquired through this connection, led Sakuma to a study of the Dutch language and Western military science for he

became convinced that only weapons of the Western type would enable Japan to defend herself successfully. In 1842, pointing to the dangers of Russian and British attack, he urged thatJapan must prepare for the struggle by purchasing modern armaments and by learning to make them, too. (W. G. Beasley: *The Modern History of Japan*, Charles E. Tuttle, Tokyo, p. 47)

6) The following year [in 1850] he put the case to the Bakufu in even stronger terms. Western countries, he said, had been able to achieve overwhelming material strength 'because foreign learning is rational and Chinese learning is not.' It was China's failure to recognize this which had been responsible for its defeat by British in the Opium War. Therefore, if Japan were to avoid China's fate, her people must study what the West had to teach in a variety of fields, not merely those which were of direct application to war. (W. G. Beasley: *The Rise of Modern Japan*, Weidenfeld & Nicolson, London, 1990, p. 25)

7) 栗原孝：佐久間象山における「東洋道徳，西洋芸術」論，明治維新の人物と思想（明治維新史学会編）吉川弘文館，1995，p. 5

8) W. G. Beasley: *The Rise of Modern Japan*, pp. 25-26

9) 江華島事件では「アメリカのビンハム公使は日本全権の黒田清隆に，ペリーの書いた『日本遠征記』を贈って，ペリーの戦術どおりにすることを示唆している．清国を宗主国とするシステムにたいして，日本は，このとき，まったく別のシステムに属する国家として挑戦しはじめているのである」(矢野暢：国際化の意味――いま国家を越えて，日本放送出版協会，p. 133～4)

10) Among its provisions was one which described Korea as an independent country, having 'the same sovereign rights as Japan', which could be read as a denial that her place in China's traditional 'tribute system' made her a Chinese vassal state. (W. G. Beasley: *The Rise of Modern Japan*, p. 144)

11) 志賀重昂もその一人であるが，その立論の根底にあるものが先進帝国主義国の「跋扈強梁」に対する警戒心であったことは同様である．（橋川文三：逆順の思想　脱亜論以後：勁草書房（東京）,1984, p.22）

12) 慶應義塾編纂：福沢諭吉全集　第五巻，岩波書店，1970,「時事小言」p.187

13) 福沢諭吉全集　第八巻「朝鮮の交際を論ず」（明治15年 3月11日），p.30

14) 丸山真男：戦中と戦後の間，みすず書房，1976,「福沢諭吉の儒教批判」p.113

15) 福沢諭吉全集　第八巻,「圧制も亦愉快なる哉」（明治15年 3月28日），p.66

16) 福沢諭吉全集　第八巻「牛場卓蔵君朝鮮に行く」（明治16年 1月），pp497-498

17) 橋川文三：順逆の思想，p.35

18) 福沢が「文明には外に見はるゝ事物と内に存する精神と二様の区別あり」(『概略』) と述べ，「内に存する精神」をまず学ばなければならないとしている（岩波文庫,p 29)のは，幕末から明治維新にかけてよく機能した佐久間象山の「東洋の道徳，西洋の学芸」という使い分けでは西洋の文化を正しく吸収することはできない，それよりも「先ず人心を改革して，次で政令に及ぼし，終に有形の物に至る」のがよいとする考え方からである．

19) G. B. Sansom: *The Western World and Japan* p.378

20) 福沢諭吉全集　第九巻，「外交論」p.196

21) 板垣退助「欧州旅行の感想」ケネス・B・パイル：新世代の国家像　明治における欧化と国粋，社会思想社，1986 より再引．p.207

22) 金両基編：アジアから見た日本，河出書房新社，1994，p.22

23) １８９５年４月に締結された日清講和条約の第１条に「清国ハ朝鮮国ノ完全無欠ナル独立自主ノ国家タルコトヲ確認ス，因ッテ右独立自主ヲ損害スヘキ朝鮮国ヨリ清国ニ対スル貢献典礼等ハ将来全ク之ヲ廃止スヘシ」とある．独立自主の国家とは朝鮮が宗主国清国から離脱することを意味するだけであって，日清戦争後，実質上朝鮮は日本に従属化することになった．

24) E. H. ノーマン：日本における近代国家の成立（岩波文庫）,1993, p.303

25) 沢田昭夫他編：日本人の国際化，日本経済新聞社，

1990, p.12

26) 富田正文：考証福沢諭吉（下），岩波書店，1993, p.599

27) 正田健一郎：日本における近代社会の成立（下),三嶺書房（東京），1994, p.12

28) A newly emerging nation could not have survived without far-sighted, comprehensive plans for national reconstruction and defense given the intense international rivalry of the late nineteenth century when a nation became either an imperilaist or a victim. Buttressed with the ideology of social Darwinism imperialism was lauded rather than condemned; imperialism was a sign of a strong country. For Japan, especially, imperialism was a means of attaining equality with the West, one of the primary goals of *Meiji* Japan. Both sides of the scholarly argument appear oblivious of the fact that current perceptions of imperialism differ drastically from those of the turn of the century. (Bonnie B. Oh, *Meiji Imperialism: "Phenomenally Rapid", Japan Examined Perspectives of Modern Japanese History* (Harry Wray and Hilary Conroy, ed.), University of Hawaii Press, Honolulu, 1983, p. 126)

29) 金両基編：アジアから見た日本，p.37